

「高度成長」論覚え書

——「高度」の語感をめぐって——

加藤 典 洋

1

1960年7月に池田内閣が発表した「国民所得倍増計画」はやがて「高度経済成長政策」と呼ばれ、その呼称が、池田内閣の手を離れて日本社会に定着していく。次に、その「高度経済成長」という呼び名から「経済」の二字が脱落して、「高度成長」という用語が1960年代から1970年代初頭にかけての日本社会の一大変動を指す言葉として定着を見る。

現在、われわれは「高度成長」期ないし1960年代の「高度成長」と、何の気なしに口にするのだが、この呼称はある奇妙さを伴っているのではないだろうか。そもそも「高度成長」という時、われわれの含意の中で何が「高度」に「成長」しているのだろう。ちなみに高度経済成長に該当する英語は rapid economic growth であって high economic growth ではない。ここでは rapid (高速度) が high (高度) に読みかえられるのに応じて、growth の主体も、経済から日本社会自体に読みかえられていると見えるのである⁽¹⁾。

われわれの関心はなぜここで「高度」という形容が選ばれているかということにある。たとえ政策立案者にその語が選ばれても、それを国民の大多数が受け入れなければその定着はありえない。それは中国の「大躍進」政策におけるように「大」でもよかったし、米国の New Deal 政策、ソ連の NEP (New Economic Program)⁽²⁾ におけるように「新経済成長政策」、つまり「新」でもよかった。そのことを考えるなら、なぜこのとき、日本国民が「高度」の二字に反応したか、という

ことは、一つの問いを構成していると思える。

即ち、1960年代から70年代初頭にかけての一大社会構造の変化は、いずれにせよ社会変動の一例であり、社会がいままでのようなことにならないことへの認識を前提としている。一言でいえば、世の中が変わる、ないし変わったという実感がそこにある。その変化を、何かにより「高度」になったというように受けとるのが一番しっくりしていたということの結果が、「高度成長」という呼称なのだろうが、では、なぜ「大」でも「新」でもなく、それは「高」であったのか。

しかし、そこまで言うとは、いや、それはわからない、もしこの時「高度経済成長」政策ではなくて「新経済成長」政策というものが現れていたなら、それはそれで定着を見ていたのではないかと、重要なのは中身で、呼び名などにそれほど多くの意味を見出すべきではないのではないかと、という反論がただちに想定される。

この種の問題の難点は、これが検証不可能だということ、ほんらいであれば検証不可能なことは論点から外すべきであろう。けれども、一方、その論理の節約原則を適用すればこの種の問題は将来にわたって問題とされえない。検証不可能ではあるけれども、ここには一つの問題がやはり顔を出しているのではないかと、そうわれわれの考える理由は、次のようなものである。

たとえば、戦後ほどなく現れて「マイホーム主義」なる言葉を生んだ新語に「マイホーム」がある。「マイホーム」は言葉としては「我が家」とそれまで呼ばれていたものの新語である。しかしなぜ「我が家」ではなくて「マイホーム」なの

か。

これには、「私の家」という場合の「私の」の語感の忌避、他のことはどうしても自分（の家）だけよければよい、という自己中心的な色合いの消去という無意識裡の選択が働いているという説があるのだが⁽²⁾、われわれは、この説には説得力があると感じる。

「減私奉公」的社會で「私」を強く言いたてるのには勇気がいる。そこで、「私」の語感をできるだけ弱めたい。その無意識裡の選択が、「私の」ではない「マイ」の語を選ばせているのではないか。

では、なぜ「我が家」ではいけなかったのか。

「我が家」は大家族を前提にしている。そういう状況下、そこに核家族が現れた時、大家族ではない核家族用の持ち家を指す言葉として、「マイホーム」という言葉は現れたと考えられる。「大家族」は家父長制をつうじて「減私奉公」の社會倫理とつながっている。核家族はイエの否定を前提としている。それはまづイエ（家父長制家族）の否定であることで「減私奉公」的社會感情を逆撫でするものだったのである。

ことによれば「マイホーム」という呼称は核家族に「持ち家」を買わせたい企業側が、その心理的障害を除去するために採用し、社会的にやがて定着を見たものだったかも知れない。その企業の思惑が、核家族を形成し、イエから独立したいというまだ十分に社会的に認知されていない時期の國民大多數の欲望と、合致したのだったかも知れない。そしてそこにはまた、「贅沢は敵だ」という消費的購買願望の罪惡視という心理的障害の除去という要因すら含まれていたかも知れない。

この呼称が車に転用された「マイカー」という呼称には明らかにその後者の要因が含まれている。この仮説に立てば、「マイホーム」という呼称にもまた、社會通念からのほんの僅かな逸脱とその消去の身ぶりが含まれていることになるだろう。つまり、この語は、「マイホーム主義」（自分の家のことしか考えない現状肯定の無關心派）という貶辭をやがて生む、その条件を備えて、当初から世に生みだされていたかも知れないのであ

る。

「マイホーム」、「マイカー」「マイルーム」と、この後現れた類語を並べてみると時代を下るにつれ、「マイ」の語感がニュートラルになってきているのがわかる。また「マイホーム」という呼称自体を考えても時代をふるにつれ、語感が中立的になってきているのがわかる。

このように、ある種の新呼称の定着には理由がある。その理由がない場合にはたとえ鳴り物入りで命名しても、それは定着しない。数年前の東京都における「国鉄」民営化に伴う「国電」の「E電」への名称変えの失敗は、その一例といつてよい。

では、「高度」という呼称の定着に、どのような社會成員の無意識の働きを見るべきなのか。そしてその時必要とされる考え方は、どのようなものとなるべきだろう。

近代以降のジャーナリズムに現れた「これまでと違う、変わった」という実感に与えられた形容を見てみると、およそそこに三種のイメージ基質があることに気づく。一つは「大」、もう一つは「新」、そして最後が「高（高度）」である。

つまりこの仮説に立てば、日本人がこれまでで社會の変化をとらえる仕方は、「小さいものが大きくなった」か、「古いものが新しくなった」か、「これまでのものがどこか質的に変わり、高度になったか」のいずれかでしかないのではないかと考えられるのである。

ある社會の変化が、こうして「大」あるいは「新」あるいは「高」というイメージ基質を伴って社會成員に受けとめられる。この仮説に立つなら、1960年代から1970年代初頭にかけての日本社會の変動は、「大」でも「新」でもないところの「高」というイメージ基質を伴う変化だったというるわけだが、では、このことは、何を意味しているのか。われわれは、ここから、このような仮説的問いを受けとることができるはずである⁽⁴⁾。

2

この仮説は「高度成長」期の社會變動を考える

うえで、どのような知見をわれわれに与えるだろうか。

まずこの仮説の現実妥当性だが、わたしはこの「大」「新」「高」仮説を雑誌『中央公論』の総目次（『中央公論総目次』）の検証によって思いついた。これは、1980年12月に刊行されたもので、1887年の創刊号から1980年12月号まで総数1,000冊の同誌目次を収録している。ほんらいであれば、この収録総タイトル数における「大」「新」「高」の頻出数を調査し、この仮説の基礎を数量的に提示したうえで、たとえば他に二誌ほどで同様の数量分析を試み、この仮説の妥当性を検証する手続きを踏まなければならないかも知れないのだが、遺憾ながら、現時点でこの作業はまだ完了していない。調査結果はいずれ作業完了後、改めて報告したい。⁶⁷

以下、ざっとこの『中央公論総目次』から得たイメージ基質仮説の骨格を粗描しておく。

この明治20年（1887）から昭和55年（1980）にいたる総目次を通読して気づくのは、第一に、目次タイトルにおける「これまでと違う」ことの形容がおおよそ「大」と「新」とからなること、ついで、その「大」と「新」の使用頻度に、時代的な波動が認められるということである。

たとえば、明治から大正にかけての同誌目次にこれまでにない事態の変動を形容する語として「新」の頻出する一時期がある。ついで大正3年（1914）の「世界大戦」後ややあって、この支配的イメージ基質としての「新」が、「大」に変換されていくのが観察される。つまり、前者の時期、「新作家の起こる可き時」（1907年4月）、「新興の文学は宗教の牙營に切り込み」（1908年4月）、「新露国みやげ」（1908年10月）、「新政党組織の大勢」（1909年3月）以下「新領土の夏」、「新しき女」、「新しき支那」、「新ハムレットと新ドン、キホーテ」、「新哲学」、「新版図」、「新日本主義」「新道徳」等々多くのこれまでと異なる事象の変化に「新」の語が冠せられる期間が後述の1918年まで続くが、一方1914年の「世界大戦」前後から、「日本の大外交」、「大戦後の予断」「大陸美論」、「大亜細亜主義とは何ぞや」以下「世界的大

使命」、「世界の[・]大思潮」、「[・]大衆」、「[・]大都市」、「[・]大東京」等々、「大」の語が目立つようになる。この「大」の時期にとどめをさすのは、内にあって「[・]大震災」（1923）外にあって「[・]大恐慌」（1929）であって、たとえばこの「[・]大震災」を境に、当時「[・]大東京」と呼ばれはじめていた東京は、ふたたび「[・]新東京」へと戻っていくのである。

この「新」と「大」のイメージ基質の転換は、たんなる偶然だろうか。

しかし、たとえば、この時「世界大戦」と呼ばれた第1次世界大戦は World War であり、その英語表記に「大」の字はない。なぜ日本でこれが「[・]大戦」と呼びならわされたかという疑問が当然生じる。

武者小路実篤の「[・]新しき村」創設とロシア革命（1917）に刺激を受けた東京帝大学生による「[・]新人会」の結成はともに大正7年（1918）である。武者小路の「[・]白樺」派はそもそも偉大な明治の精神に殉じた乃木希典に反発して現れた新世代にはかならなかった。明治の「[・]偉大」の消滅が、2年後の世界戦争に「大」の字をつけさせているのだろうか。1910年の事件には「[・]大逆」の名が与えられた。朝鮮を併合し「[・]新版図」ができあがり、また「[・]新しき女」青踏社の運動がはじまるのもこの時期のことである。これらの事実、ある「これまでと違う」事態のなかで異質な「これまでと違う」事態が生じる時、人々が無意識のうちに「大」と「新」とを使いわけているのではないかと、われわれに考えさせる。

この「大」と「新」の交替ということで容易に連想を許すもう一つの時期はいうまでもなく昭和20年（1945）8月15日を境とする一時期だろう。そこでは「[・]大日本帝国」「[・]大東亜戦争」から劇的な「[・]新日本」「[・]新しき夜明け」への転換が見られる。そしてそこでは新しく、「大」の消滅の事態を胡塗するものとして「新」の呼称が強調されている可能性を、否定できない。

ところで、ここで「高」について考えてみると、どういふことになるだろうか。

「高」は、1960年代の初頭にいちど頻出の時期を見る。いうまでもなく「高度経済成長」政策を

めぐるものとしてである。けれども、その「高」が誌面において頻出を決定的にするのは、むしろ1970年代後半に入ってからのことである。1964年には「東海道新幹線」と「東名高速道路」が出現しているが、この延長上にやってくるのが「超高度の時代」であり「高度産業資本主義」であり、「高度消費社会」であることから明らかなように、1970年代後半以降こそがむしろ「高」の時代なのである。

1980年代をへて、1990年代の現在にいたるまで半導体企業に代表される「ハイテク（高度技術）」にささえられた「高」の時代（「高度情報化社会」あるいはかつての「3C」に代わる「三高」の時代）が続いていることは誰の眼にも明らかだろう。

ところで、この「高」のイメージ基質に注目して『中央公論総目次』にあたると、「高度成長」期に先立ち、一度だけ戦前において「高」の現れる時期のあることに気づく。1941年3月「内閣制度の高度化」。その半年後、同年9月の同誌特集は「日本高度国防国家の構想」である。

後に述べる理由から、われわれは1960年代の「高度成長」の動態はむしろ「新」であって、1973年のオイルショック以降むしろ日本社会に「高」の時代ははじまっており、それを経済学者岩井克人にならば、第二次高度成長期と呼ぶべきではないかと考えている。

以下、この戦前の「高」の出現に的を絞り、この時期の「高」のイメージ基質について考えてみる。

3

『中央公論』総目次に戻れば、まず1930年代後半、再び「新」の字の現れだす一時期がある。曰く、「革新日本の歴史的使命」（1938年5月）、「新時代を戦ふ日本」（1939年6月）。この後者の書き手は先の奉天特務機関長土肥原賢二（少将、後に東京裁判でA級戦犯として死刑）。この時期の「新」に、かつての大正期の「新しき女」、「新しき村」に見る「新」のデモクラットな語感はない。1939年9月、「新しき事態」、1940年7月「新党運動の

展開」、8月「新政治体制の出路」、9月「新体制・近衛内閣の責務」。はじめにあげた「革新日本の歴史的使命」の半年前に日独伊防共協定が締結されている。これに先立ち、1933年には日本が満州国建国を契機に国際連盟を脱退している。

この「新」はどこからきているのだろうか。1930年代前半の同誌のナチスドイツ、ヒトラーへの言及を見ると、「ヒトラー論」、「妖怪ナチスの脅威」、「ナチスドイツは踊る」（1932～35年）とまだ大正デモクラシー期のリベラルの色合いが濃く、これらへの否定的色彩が強い。その、これまで否定していた陣営に自分が入りこむことになった時、日本社会の選びとっている「変動」のイメージ基質がこの価値観を脱色した「新体制」、「革新官僚」の「新」なのである。

「高度国防体制」の「高」は、この「新体制」、「革新官僚」の「新」から生れてくる。

この時の「高度」の語感をよく伝えるのは次のような当時の政策ブレーンの一人、笠信太郎の著書『日本経済の再編成』（1939年）に提示された、日本経済の現状分析だろう。

『昭和経済史』の中村隆英によれば、そこに示された太平洋戦争前後の日本経済の現状とは、次のようなものだった。以下、中村の要約によるが、笠はそこにこう述べている。

現代の日本経済は、軍需の必要欠くべからざる増加と輸入規模の制約のため、だんだん生産の規模が縮小する「縮小再生産」の状況にある。これをどう打開すればよいか。ほんらい、「個々の企業は利益を目的にして経営されている。しかるに、この国の大事に際してもまだこの利益優先の思想が残っているので生産があがらないのだ。やはりもうここまでくれば、企業の性格から変えてかならなければならないのではないか」。生産力の発展に害になるものは、全部取り除かなければならない。そうすれば「純粋なかたちで統制の実を挙げることができるであろう。これまでの『外から上から』の統制を『内から下から』の統制に切りかえるべきである」⁽⁶⁾。

笠は、輸入の制約を受け、しかも軍需という抑圧調整できない需要を前に、総供給量がこれに応

えられないばかりか、むしろだんだん生産規模の縮小する「縮小再生産」の状況に入っている以上、「利益優先」を「生産力の発展」優先に変える経済思想の一大変換が必要だと述べている。ここにあるのは明らかに、自由主義経済から計画統制経済への考え方の転換である。笠はこの当時、朝日新聞社にありながら同時に後藤隆之助の主宰する近衛文磨のための政策ブレーン集団「昭和研究会」の経済部門の中心メンバーであり、その『日本経済の再編成』⁽⁷⁾は反響を呼び、ベストセラーとなった。「昭和研究会」はこの笠の経済政策思想を具体化して「日本経済再編成試案」を作成しているが、翌1940年に発足した二次近衛内閣下、企画院が「新体制」の一環としてこの試案に基づく経済新体制論を構想し、その結果企画院事件が起こっている。企画院事件というのは、「利潤本位」から「生産本位」への転換をめざすこの構想に財界が反発し、企画院の「新官僚」（陸軍の秋永月三、大蔵省出身の迫水久常ら）に共産主義者との攻撃がなされ、その結果、企画院でマルクス経済学などを学んでいた和田博雄、稲葉修三、勝間田清一などが治安維持法違反で捕った事件をさすが、これにあわせ、商工省次官岸信介が財界出身の小林一三商工相に罷免されるという事件もこの時同時に起こっている⁽⁸⁾。最終的に第二次近衛内閣はよりおだやかな経済統制政策である財界との妥協の産物「経済新体制確立要綱」を定めたにとどまるのだが、この当初の考えの延長上にあって一年後、第三次近衛内閣下提唱されるのが「高度国防体制」にはかならない。即ち、「高度国防体制」の「高」は、経済規模の拡大も、経済体制の立て直し・更新も不可能ななかで、つまり「大」も「新」も不可能ななかで、なお質的集約の方向に現状打開を企てようとするところで擱まれた、第三のイメージ基質にはかならないのである。

ここから導かれるのは、たぶん次のような「高」のイメージ基質としての性格である。

たとえば、世界で最も単位作付面積での収穫量が多い日本列島内での稲作のことを考えてみよう。なぜこのようなことになったのだろうか。

日本列島の稲作は、まず、稲作に適した温帯あるいは亜熱帯地域の平地ではじまったはずである。その収穫量の拡大は、はじめ、作付面積の拡大という形をとっただろう（「大」）。けれどもある時点で、その耕地面積の限界にぶつかり、それ以後は山を切り開き、開墾し、あるいは品種改良を繰り返して耕作地の「北限」をしだいに上方訂正していく形をとったに違いない。つまり、当初は耕作地の拡大、ついで、稲の品種改良による新耕作地の開拓という方向に向かったに違いない（「新」）。しかし、その上限が北海道にまで達し、もはや耕作地の増大は見込めないとすれば、どうなるか。その後に来るのは耕作地における集約度の高度化以外にない（「高」）。その動因はやはり稲の品種改良を含むにしろ、その品種改良の方向がそこでは新耕作地の可能性の追求から、集約度の向上へと、質的に変換されているのである。

ここから得られるのは、次のような「変化」受容における三つのイメージ基質の図式であるといっよ。

ここに発芽・生長・増殖を繰り返かえすイースト菌をたっぷり含んだパン種がある。それを適切な環境に置いてやり熱を加えると、それはやにわに膨れだす。それは膨らむ。大きくなって自然にそのまま広がる（「大」）。けれどもそれを四方からたとえば木枠で囲んでやる。するとどうなるか。それはもうそれ以上広がることができない。それが工夫してこの困難を乗り越え、さらに拡がろうとすればそれは今度は、上に向かって伸びはじめ以外ないだろう。それは上に伸びる（「新」）。ところで、さらにその木枠の中、ビルディングのように上に上にと伸びてゆくそのパン種の上方をふさぐ。そこに蓋をしてしまう。するとどうなるだろう。パン種はその天井に届く。しかしもうそれ以上、拡大も伸長もできない。それは、身動きがとれないまま膨らみ続ける。それは密度が濃くなり、集約度を高め、稠密化し、いわば「高度化」するはずである（「高」）。

この「大」と「新」と「高」のイメージ交替がどのように継起するか、また、そのイメージ基質がそのまま、「大」は「大」、「新」は「新」、「高」

は「高」と、正確な命名を得るかは確証の限りではない。

たとえば1939年から41年にかけての「新」から「高」への過程は、まさしく、パン種に本粋がはめられて「革新官僚」が生じ、輸入制限と軍需拡大の必要の中でさらにその木枠内に「蓋」をかぶせられて「高度国防体制」が生じてくるというように、この動態と命名の間に正確な対応が見られるとあってよい。1945年8月を境としての「大」から「新」への転換も、敗戦、占領による「木枠」の設置によるイメージ変換の一例と見られる。けれども、1960年の「高度成長」は、後に見るように経済動態としてはむしろ「大」に該当しつつ「新」として現れた例と見るべきで、「高」の動態はそこに認められない。「高」の動態は、むしろ1973年のオイル・ショック以降に来る。「高」の時代はそれこそ「高度情報化社会」、「高度技術社会」である1980年代以降に合致するのである。

ところで、この「大」「新」「高」仮説に根拠と云うものはあるだろうか。先に述べたように、これはほんらい確証不可能な問題領域に属する。けれども、たとえば次のような事実をあげてみることができる。この「大」「新」「高」が奇妙な連想へとわれわれを導く暗示力に富んでいることも、事実なのである。

たとえば、古代東アジア世界でそれまで「倭」という蔑視を含んだ他称に甘んじていた列島内国家がはじめてその「世界」に参入し、自称をもった時の身ぶりが、その「倭(和)」に「大」の字を冠し「大倭(大和)」と名乗ることだった。またその列島内国家がはじめてもった国号が、やはり「大化」だった。

しかも、この身ぶりは1,000年を越えて再び繰り返される。日本が18世紀に当時の「世界」に再び参入する際、名乗る国名がやはり「大」を冠しての「大日本帝国」だからである。

世界史的旧宗主国ともいふべき英国の Great Britain 国名を除くと国名に「大」の字を被せる例は、そう見当らない。現在では「大韓民国」くらいのものであるが、この「大」も実をいえば日本起源である。旧大日本帝国は1897年、閔妃暗殺

の2年後に李朝朝鮮に圧力をかけ、これに「大韓帝国」と名乗らせた。それは「大日本帝国」をなぞった国名なので、「大韓民国」は、その「帝」を「民」と変えたものなのである。

ではなぜこの時「倭」の選んだ国名が「大」を付した「大倭(大和)」だったのだろうか。当時の古代中国を中心とした東アジア世界の東辺を朝鮮半島・日本列島の範囲で考えると、それは朝鮮史で「三国時代」と呼ばれる時期であり、その三国とは高句麗、新羅、百済であって、倭は百済と同盟関係を組んでいた。そして、このうち、百済の滅亡し、多くの百済人が当時辺境に位置していた倭に流入してくるのが7世紀後半のことである(新羅・唐連合軍による百済の滅亡は660年)。

国名とは、古代日本における場合と同様どこでもいわば“美称”の性格をもっている。古代においてその傾向はいま以上に強かったのではないだろうか。いずれにせよ推測にすぎないわけだが、こんなことをいうのは「高句麗」、「新羅」、「大和」のうちに、「高」「新」「大」の字がそのまま見えるからだ。「高句麗」国名は朝鮮の史書『三国史記』によれば前37年に定められ、その出所は地名(前82年以降の第二次玄菟郡の主県名)である。しかし4世紀後半に建国される「新羅」国名は「斯盧国」からの改称であって、その「改称は、国の内外での飛躍的な発展による」と語られている⁽⁹⁾。何の根拠もないのだが、6世紀なれば、「倭」がはじめて自称の国名をもつにあたり「大和」の字を選び、その最初の国号を朝鮮半島から借用する形であれとにかく「大化」(大きくなるの意)をとったという事実は、何か、すでに「高」、「新」の美称を他国もっている以上、これに対抗して後発国が「大」を採用せざるをえなかった事情を連想させる。つまり、7世紀なれば、古代日本が「大」の字を選択した時、彼らが眼前に「高句麗」の「高」、「新羅」の「新」にたいする「大」をそこに見ていた可能性を、わたしなどは否定しにくいのである。

けれども話を戻せば、ここで重要なことはその「変化」が「大」という形で人々の前に現れ、そう受けとめられようと、またそれが「新」である

うと、「高」であろうと、その「変化」の原動力ともいうべきものが不変の同一性を示しているということのほうではないだろうか。「大」「新」「高」はここで、いわば同一の力が異種の環境の中に置かれてとる三種の変化の態様にほかならないのである。

これら、以上に見てきた時代にあって、こうした「新」とか「大」の語感に注目した人物がこれまで全くいなかったというのではない。

1936年、中野重治は、「新官僚」の「新」の語感に、鋭敏な拒否反応を示す一文を残している（「文学における新官僚主義」⁽¹⁰⁾）し、また、1948年、大岡昇平はその独自の記録文学『俘虜記』の敗戦の知らせをフィリピンの俘虜収容所で聞く場面で、主人公に次のような感慨をもらさせている。

私はひとりになつた。静かに涙が溢れてきた。反応が遅く、いつも人よりあとで泣くのが私の癖である。私は蠟燭を吹き消し、暗闇に坐つて、涙が自然に頬に伝ふに任せた。

では祖国は敗けてしまつたのだ。偉大であつた明治の先人達の仕事を、三代目が台無しにしてしまつたのである。歴史に暗い私は文化の繁栄は国家のそれに随伴すると思つてゐる。あの狂人共がもうゐない日本ではすべてが合理的に、望めれば民主的に行はれるだらうが、我々は何事につけ、小さく小さくなるであらう。偉大、豪壮、崇高等の形容詞は我々とは縁がなくなるであらう⁽¹¹⁾。

こうして、明治期に誕生した「大日本帝国」は70余年をへて「新官僚」による「高度国防体制」のもと、「大東亜共栄圏」を夢み、最後に挫折する。

けれども、その日本の「国体」が根絶しにされたわけではない。踏み潰されはしたが、パン種は残る。

被占領という桎梏の中で開始される戦後日本は、「新憲法」のもと、「新生」文化を標榜し、やがて「大衆」社会を実現し、十余年後、「もはや『戦後』ではない」として再び「高度経済成長」

政策というものを唱えることになる。

ここにあるのは「大」「新」「高」仮説によれば同一の力である。けれども、それについて触れるに先立ち、この「高」の語感についてももう少し見ておきたい。

4

先に触れたように、1959年、この「高」の提示の直接の発端となつたのはかつて「高度国防体制」をになつた戦前の代表的「新官僚」岸信介の首相在任時の経済政策諮問だつた。ところでこれは、たんなる偶然だろうか。

「国民所得倍增計画」の実質的立案者といつてよい下村治は、1958年、大蔵省内部資料「経済成長実現のために」の中にこう書いている。

終戦後多年の間われわれが心を碎いてきたのは、ともすれば行過ぎがちな総需要をいかにして総供給量の範囲内に抑圧調整するかであつたが、いまや、われわれは充実した供給力をいかにして健全な経済成長として実現するかを問題とすべき時期に到達した⁽¹²⁾。

1939年、近衛内閣の政策ブレーン集団「昭和研究会」の笠信太郎は、動かすことのできない総需要量（総軍需量）に総供給量（生産量）を無理にでも上げるべく、——つまり八方ふさがりの中、なお生産量を増大させるべく——日本経済の「再編成」（高度化）を唱えたのだったが、敗戦はその関係を逆転させ、今度はいわば動かすことのできない総供給量の範囲内にいかにして総需要量を「抑圧調整」するか——八方ふさがりの中でその範囲内にいかに需要量を抑えきるか——が課題とされるようになる。前者で「高度化」とは「利益本位」から「生産力本位」への産業・構造の転換、統制・計画経済の導入による生産力の集約化を意味している。そこには動かすことのできない「総需要量」という「木杵」があつた。その「木杵」が敗戦後、「総供給量」に変わったのである。

1958年、日本政府の政策ブレーンとして下村治

が指摘するのは、その「木柁」が外れた、ということ、いわばその「木柁」自体を拡大する時期に到達した、ということにはほかならない。つまり、ほんらいのイメージ基質との対応からいえばこれは「拡大(大)」の動きを示している。

では、なぜここに「大」ではなく、「高」が現れているのだろうか。

ここに「木柁」(限定)が全くなくなったというのではない。「木柁」は、政治的「拡大」、軍事的「拡大」の不可能という形でこの経済的「拡大」の動きに制約として関与している。「政経分離」という「木柁」が経済的「拡大」を(何の「木柁」もない「大」としてではなく)「高度化」として、露出させているのである。

よく知られているように、「高度成長」期の起点の一つとされる1956年度の『経済白書』の「もはや『戦後』ではない」という言葉は、同じ年の2月に中野好夫が発表した「もはや『戦後』ではない」という文章によっている⁽¹⁸⁾。戦後10年を経て、われわれはいまや過去に眼をむけた「戦後」意識から脱けだし、「少なくとも来るべき10年」への「未来の見通しに腰を据えるべき時期」に辿りついたのではないか。中野はこういう認識を示した後、国家間の関係を宿怨とか報復といった感情でとらえず、また正邪、善悪といった倫理的範疇でとらえず、そこから離れて冷静に見直す市民的成熟の必要をそこで説いているのだが、これに続けてこう述べている。

つまり、日本は戦後「小国」となった。そうである以上、今後は、近年力をつけはじめたアジア・アフリカ、中南米の「小国」の例に学び、「小国」であることに腰をすえて、新しい理想をつかむ努力をしなければなるまい、と。

戦後10年して政治の領域の一方に登場するのは、こうして政治「小国」主義ともいうべきものである。

この同じ年、1956年12月には、「小国」主義の先駆的論者の一人である石橋湛山首班の内閣が成立している。蔵相は池田隼人。この内閣の提示した「1,000億減税、1,000億施策」という積極財政は、「高度成長の果実を一方で民間還元し、他方

で成長過程の障害除去に用い、そのことを通じてさらに成長を促進するという循環作用の始動を意図した」点、「高度成長期の財政の原型を打出した」ものとして歴史的に高く評価されるべきであると後に評価されるようなものだった⁽¹⁹⁾。

この高度成長期財政の「原型」をもう一つ大きな枠組みの中でいえば、それは、政治と経済の分離を原則とし、政治的には「小国」の限定の中で経済的な「拡大」をめざす、あの「政経分離」のあり方、「新」の態様にほかならない。

ところで、3ヶ月後、1957年3月の病気による石橋内閣の互解の後を受けて登場した岸信介内閣は、ただちに、岸が鳩山内閣の幹事長時代から推進していた政治的「復元」化の方向、つまり政治的「拡大」の方向を示し、新憲法改憲をめざす憲法調査会、軍事力回復をめざす国防会議を発足させる。政権党内のハト派、タカ派の対立もまた、政治的な「木柁」の中での経済的拡大と、政治的な「木柁」自体をはずす政治的経済的拡大という二つのあり方の対立にほかならなかった。池田内閣はこのうち、石橋内閣の提示した「木柁」を前提とした経済力の伸長、つまり「政経分離」に立った経済政策を採用するが、その経済成長政策が、無意識裡に「大」ならぬ「高」のイメージ基質をまとって提示され、また無意識裡に国民にそうしたものとして受容された背後にあるのは、そのような「力」のありようの対立と選択の劇にほかならないのである。

ところで、そうであればそれはむしろ、「高」というより「新」のイメージ基質に該当する動態だったというべきではないだろうか。

というのも、先のイメージ基質の動態をそれぞれ定義すれば、「大」は限定のないところでの「拡大」、⁽²⁰⁾「新」は限定内での(無限定な)「拡大」、⁽²¹⁾「高」は、限定内における、さらに無限定な伸長をとめられた条件下での密度の高度化、のまとうイメージ基質なのだが、「政経分離」という政治的「拡大禁止」の限定のもとでの経済成長であるこの「高度成長」は、いわば「木柁」内での、しかし天井知らずの「拡大」——「新」——にほかならないからである。

この点に関し、興味深いのは、経済学者岩井克人の次のような指摘である。彼によれば、日本の「高度成長」は、二度あった¹⁶⁾。その見解は、第一次の「高度成長」が終る1970年代初頭のニクソン・ショック、オイル・ショック以降、「世界経済が長期停滞の状況のみせたその最中に、日本だけは消費のレベル、情報のレベル、技術革新のレベルで他の西欧諸国との相対的な関係において」その長期停滞とは異なる伸長を示した点に注目するもので、この1970年代後半以降80年代へと続く非停滞の時期を第二の「高度成長」期と見るのだが、この考えを援用すれば第一の「高度成長」はむしろ「新」、第二の「高度成長」こそが「高」の動態を示しているといえるからである。

岩井によれば、この第一次の「高度成長」のゆきづまりにたいして1970年代初頭、反近代論の露頭という動きが現れている。「もしこれだけで日本の成長が終わっていたら、反近代的な路線のまま、思想状況は推移していたかもしれない」のだが、その後日本は消費、情報、技術革新のレベルで「他の西欧諸国との相対的な関係においても一度高度成長とでも言うべき様相を示」した。そしてそれが、その後日本が率先して「ポスト近代的なところに突出して」思想的展開を示すことになったことの物質的基盤してはかならない。

岩井の指摘をここでの文脈に置き直すならこうなる。第一次の「高度成長」は「新」にはかならなかった。この「新」はやがて反動として「反・新（反近代）」の思潮を生む。1970年前後に日本に生じた「情念」と「土着」への思想動向がそれにはかならない。いわば「速すぎる」「新」の伸長にたいし、一つのリアクションが生じる。もし、ここで「成長」がとまっていたら、日本の思想動向は「反近代」へと向かったのかも知れないのだが、1972～3年のニクソン・ショック、オイル・ショックをへて、この「反近代路線」は杜絶する。なぜか。第二次の「高度成長」、いわば「高」への伸長、「蓋」をふさがれた中での電卓戦争に代表される「高度技術」産業の拡大——「高度化」——がこの「新」と「反・新」の対置の構図自身を無化しているのである。

この岩井の指摘のように、経済的な成長の動態からいうなら、このニクソン・ショック、オイル・ショック以降のいわば「天井をふさがれた」経済力の伸長が、まさしく「高」のイメージ基質に対応している。

1970年代の「電卓」戦争に象徴される半導体を中心とした過当競争による技術革新をへて、日本経済はこの第二の「高度成長」を実現するわけだが、それは資源をもたないこの国の経済が世界経済の八方ふさがりの環境の中で実現した、あの稲作の高度集約化にも似た「高度化」だったのである。

事実、「高」のイメージ基質はこの第一次の「高度成長」の終了後、むしろいよいよおびただしくメディアに氾濫はじめる。『中央公論総目次』にあたって、さらに同様の作業を1990年代まで延長してみても同じ調査結果を得られると思われるが、曰く「高度情報社会」、「高度産業資本主義」、「超高層ビル」、「高度技術（ハイ・テク）」、「超高速」、1970年代後半以降、日本社会は「大」でも「新」でもないところの「高」の時代となっており、さらにつけ加えるならその「高」を越えるものとして、「ポスト（脱）」ということが言われているかにさえ見える。いまはこの「脱」が、「大」「新」「高」にたいし「反」とは異なるイメージ基質をもちうるかどうか、検討の俎上にのぼる段階といわなければならないのである。

ここからは、したがって次の三つの問いがとりだされうる。

1. 「大」「新」「高」という三種のイメージ基質を帯びて現れてきているこの日本近代の「力」の伸長動態がここに見るようにただ一種の、不変の「力」の発揮のさまざまな環境の中でとる外観にすぎないのであるとするなら、つまりそこにわれわれ日本人の見ているのが一種の不変の「力」にすぎないのであるとするなら、その「力」の実体とは何か。またそのことは、何を語っているだろうか（「力」の不変性）。

2. もし、1.のことが事実であるなら、たとえば日本の戦後社会は敗戦にとまらう「戦後の諸改革」、60年代の「高度成長」をへて政治的、経済

的、社会的に激変を経験しながらもそのより深いところで、いよいよその変動とは逆向きの力、いわば「均質化」の程度を深めていると考えられる。では、「戦後の諸改革」、および「高度成長」をへていよいよ「均質」的になるこの日本社会の動きは、その均質性の動きをどのように、またどのような深度にまで、われわれの意識内部に貫いているのか（「均質化」の深度）。

3. さらに、同じくこの1.の仮説が事実であるとすれば、「大」「新」「高」の後に現れている「脱」のイメージ基質は、どのような条件で「大」「新」「高」を貫く「力」の行使それ自体を相対化する原理を指示するものとなりうるだろう。言いかえるなら、「大」「新」「高」の現れをもつこの不変の「力」の行使を相対化する原理とは、どのようなものか（「力」の相対化の契機）。

5

ところで、この第一の設問を考察するうえで参考となるのは、丸山真男が1972年に「歴史意識の『古層』」の中で提示した、次のような仮説ではないだろうか⁽¹⁶⁾。

丸山はこう述べている。

日本の「歴史叙述なり、歴史的出来事へのアプローチの仕方なり」を観察すると、その基底にある思考様式、あるいは発想様式のパターンがあって、それが外来のそれと倍音を奏でたり、互いに打ち消しあったりしながら持続低音のように日本における歴史意識に通底してきたのではないかという考えに導かれる。その発想様式のパターンを記紀神話の冒頭の叙述から抽出し、かりにこれを歴史意識の「古層」と呼び、そのいくつかの基底範疇をひろってみるとこうなるだろうか。「なる」、「つぎつぎ」、そして「いきほひ」と。

世界の諸神話にある宇宙創成論を見ると、その発想の底にながれる三つの基本動詞にぶつかる。「つくる」と「うむ」と「なる」。ここで行為の主体と客体の分離・非分離に着目するなら「つくる」と「うむ」が分かれる。「つくる」で分離しているものが「うむ」では血の連続性をもつ。一方、誰が、という主語の明示を必要とするか否か

で見ると「つくる」、「うむ」が一緒になって、「なる」と分かれる。「なる」は、XがAを「つくる」＝「うむ」という時の「X」たる主格の明示を必要としないからである。

この三者の関係を図式化すれば、一線上の両極に「つくる」と「なる」が来て、その中間で「うむ」が浮動する。この中間項「うむ」が、「つくる」のほうにブレるか、「なる」のほうにブレるか。さまざまなカルチュアなり民族なりの世界像の特徴を、この三者の相対比重、相互間の親近関係によってとらえることができる。

「つくる」論理の強いユダヤ・キリスト教系列の世界創造神話では「うむ」が「つくる」に牽引される。そこでは誰が「うむ」かが問題となる。しかし日本神話ではこれと対蹠的に「うむ」が「なる・なりゆく」に近づく。そこでは何がどのように「うまれる」かが問題となっている。「なる」論理が強いということが日本の記紀神話の特徴なのである。「生・成・変・化」、これらの語のいずれもが『古事記』では「なる」と訓まれる。さらに「為・産・実」、これも「なる」である。

この「古層」を通じてみた宇宙は、(……)まさに不断に成りゆく世界にはかならぬ。こうした「なる」の優位の原イメージとなったものは、おそらく、「ウマンアシカビヒコジ」の「葦牙」(アシカビ=葦の若牙——引用者)が「萌え騰る」景観であろう。この原イメージは、次項の「つぎつぎ」にも「いきほひ」にも貫徹している。有機物のおのずからなる発芽・生長・増殖のイメージが同時に歴史意識をも規定している(……)のである⁽¹⁷⁾。

ついで、記紀神話冒頭の世界創成の記述で目につくのは、「つぎ」・「つぎつぎ」の多用である。『古事記』では国生みからイザナミの「神遊」まで47回、イザナギのミソギから三貴子の誕生までのわずか二段に、21回。これをたんなる「物の列挙」と見るのには無理がある。なぜ、のべつまくなしに宇宙と神々の発生を「羅列」によって語らなければならないか。そこにやはり、「世界を、

時間を追っての連続的展開というタームで語る発想の根強さを見ないわけにゆかない。この「つぎつぎ」の発想が、「なる」の論理と親和して歴史の範疇としてあの無窮の連続性、「血統の連続的な増殖過程」という表現を得ているのである。

さらに、言葉としては現れないが、実質的な発想としてとくに中国の用法と比較して記紀神話に特徴的に現れるものに、「いきほひ=徳」という用法がある。

「徳」は、中国の古典では一般に倫理的な規範性を帯びている。一方、『日本書紀』をはじめとする日本の史書で「徳」は「以支保以(いきほひ)」と訓まれる。その実質の意味は、倫理的、規範的な観念というよりは「威・勢というに近い」。「雄略紀」に、雄略天皇を人を大勢殺した「大悪天皇也」としながら、その年半後に「有徳天皇也」と評している記述がみつかると、「中国正史における人物描写で、『大悪』にして同時に『有徳』というような性格づけはおおよそ考えられない」。「単純化していうならば、ここ〔つまり『日本書紀』〕では『徳』があるから『いきほひ』があるのではなくて、逆に『いきほひ』があるものに対する讃辞が『徳』なのである⁽¹⁸⁾。

この「徳=いきほひ」の特徴は、これが、あの発芽・生長・増殖する「アシカビ」の「萌え騰る」いきおいの霊力(タマ・ヒ)へのいわば無媒介的な、手放しの信仰としてある点にあるだろう。『古事記』の書き出しの一句、「天地初発之時」の「天地初発」は、漢語にあまり見ない句だが、これと中国正史にいう「乾坤初分」、「陰陽斯開」、「天地開闢」の違いは後者がいずれも「はじめ未分化であった天地が『天』と『地』と(あるいは陽と陰と)の反対の方向に向かって分離したという観念(← →)」を表現しているのにたいし、前者「天地初発」だけが「『初発』エネルギーを推進力として『世界』が噴射され、そのまま一方向的に無限進行してゆく姿(→)」を表現している点にある。

こうして記紀神話とともに、世界の生成が、天地二分の空間的秩序の形成としてではなく、「葦牙の萌え騰る」生命のエネルギーから大地・泥・

砂・男女身体各部分の各部分が「つぎつぎ」に「なりゆく」・「いきほひ」として現れる基本発想のかたちを示す。始点に「天地」の秩序、規範があるのではない。そこには何も無い。ただ、「なにものにもとられない」エネルギーだけがある。絶えざる零地点としての「いま・ここ」からの出発という、あの歴史的オプティミズムが、ここから生まれる。

「天地初発之時」のなかにこめられた象徴的な意味(……)が、「いま」中心の観念と結びつくとき、新たな「なりゆく」の出発点としての「現在」(生る→現る)は、まさに不可測な巨大な運動量をもった「天地初発」の場から、そのたびごとに未来へ向っての行動のエネルギーを補給される可能性をはらむこととなる。この観念が、中世の「末法」的ペシミズムをくぐって生きのびたとき、それは(……)『神皇正統記』の著名な命題——「天地の始は今日を始とするの理あり」——に再現するわけである⁽¹⁹⁾。

こうして「いきほひ」は漢語にいう「勢」に結びつく。ただ、中国における「勢」はつねにある限定のもとに用いられるが、日本のそれは、それ自身限定するものをもたない最上の価値として現れる点が違う。そして、そこから、

こうした意味での「勢」が歴史的時間の推移に内在すると観念されるとき、そこに——中国の史書でさえ、稀にしか使用されない——「時勢」、あるいは「天下之大勢」という概念が、日本の歴史認識および価値判断においてきわめて流通度の高い範疇を形成するようになる(傍点原文)⁽²⁰⁾。

丸山によれば、この「時勢主義」ともいうべき日本人に強く見られる「歴史意識」は、日本人の「歴史意識の『古層』」にひそむ持続低音のごときものだ。その淵源は、古い。古いというだけでなく『古事記』、『日本書紀』の昔から日本人の歴

史的思考様式の低域に持続して鳴りひびいている。

日本の政治の変遷を「道理」の展開として語ろうとした和文による初の史論書『愚管抄』には、「昔よりなり行く世を見るに、廃れ果て、又起るべき時に相ひ当りたり」¹、「露ばかり虚言もなく、最真実の真実の世の成り行くさま書きつけたる人よも侍らじとて(……)」などとあるし、また「つぎつぎ」、「いやつぎつぎ」は、『万葉集』、『大鏡』、『続紀』など、頻出の例に事欠かない(「(……)己が負へる己が名負ひて、大君の任のまにまに、この川の絶ゆることなく、この山のいやつぎつぎに、かくしこそ仕へ奉らぬ、(……)」²〔大伴家持〕、「まことに万世もつきまじき御世の栄へ、つぎつぎ今よりいと頼もしげにぞ見せさせ給ふ」³〔大鏡〕)。

そして、やはりおびたしい「時勢」への言及もまた、このことの一つの現れとみなしうる。(「蓋し天下は勢のみ、勢の趨くところ、挽くべからず」⁴〔藤井蘭斎〕、「大江広元議、源頼朝之請、皆濟時之急務、而朝廷許之、亦時勢然也」⁵〔頼山陽『日本政記』〕、「時勢の遷変の事は天地の自からなる理なるか、または神の御はからひなるか、凡慮の測しるべきならねど、畢竟、人の智にも人の力にも及ぶべき事ならず」⁶〔伊達千広『大勢三転考』〕)。

丸山は、このように日本の古代、中世の史料に同様の「歴史意識」、「時勢主義」の現れを指摘し、この歴史意識の「古層」が日本の歴史に生き続けていると指摘するのだが、これは、われわれと無縁の指摘だろうか。

何かが変わると、われわれは「ご時勢だよ」という。時代が変わったんだよと。また何かが起こるたび、われわれはもうこうなったら仕方がない、「事ここにいたれば」仕方がないではないかと、そういう。「日清」、「日露」、「大東亜」の各「開戦の詔勅」には、こうして、この種の同じ表現が繰り返されることになるだろう。

日清戦争。

「天佑を保全し万世一系の皇祚を踐める大日本帝国皇帝は忠実勇武なる汝有衆に示す。朕茲に清国に対して戦を宣す。(……)事既に茲に至る。朕、平和と相終始して以て帝国の光栄を中外に宣揚するに専なりと雖、亦公に戦を宣せざるを得ざ

るなり。(……)」(1894年8月2日)。

日露戦争。

「天佑を保有し万世一系の皇祚を踐める大日本帝国皇帝は忠実勇武なる汝有衆に示す。朕茲に露国に対して戦を宣す。(……)事既に茲に至る。帝国の平和の交渉に依り求めんとしたる将来の保障は今日之を旗鼓の間に求むるの外なし。(……)」(1904年2月10日)。

大東亜戦争。

「天佑を保有し万世一系の皇祚を踐める大日本帝国は^{あきらか}昭に忠誠勇武なる汝有衆に示す。朕茲に米国及英国に対して戦を宣す。(……)事既に此に至る。帝国は今や自存自衛の為蹶然起って一切の障礙を破砕するの外なきなり」(1941年12月8日)。

そして「終戦の詔勅」には、こう書かれる。

「朕深く世界の大勢と帝国の現状とに鑑み非常の措置を以て時局を收拾せむと欲し茲に忠良なる爾臣民に告ぐ。交戦已に4歳を閲し朕が陸海將兵の勇戦(……)各々最善を尽せるに拘らず戦局必ずしも好転せず。世界の大勢亦我に利あらず。」(1945年8月14日。以上、傍点引用者)。

そしてこれは、日本の近代において何ら特異なことというのですらない。菊池寛は、日本の近代にあって最もジャーナリズムの感覚に富んでいた人といえるが、その名も「時勢に就いて」と題された1936年1月の文章で、明治以降、軍国化しつつある執筆当時までの日本社会を、「時勢」と、これに抗する知識人という構図で簡明に描いてみせている⁽²¹⁾。

ところで、興味深いことに、これと同じことがこれまで見てきた「高度成長」をめぐる叙述にも同様に指摘できる。

即ち、1939年、先に触れた『日本経済の再編成』の序で笠信太郎はこう述べている。

この中で私の言はんとすることはかうである。当初今回の歴史的な大事業を遂行するために、その兵站部を強化するといふことに出發して、いはゆる統制強化の一途を辿ってきた戦時経済はもう単なる「統制」の強化といふ形では来るところまで来て、それはもはや

一つの新しい経済体制に結晶しなければどうにもさまならないといふところまで来た。国民経済を強化し、次の飛躍的な充実に備へるについても、1個の新しい体制が要求されるに至ったのである(傍点引用者)⁽²²⁾。

また、1956年、中野好夫は同じように戦後10年をへて、やはり時ここにいたれば(10年をへたのであるから)、われわれはもはや過去に拘泥すべきではない、「もはや『戦後』ではない」、いまや「小国」の理想を前向きに考察すべきであると説き、下村治は、1958年、われわれはこれまで総需要量を何とか総供給量の範囲内に抑圧調整することに心を砕いてきたが、「いまや」この姿勢を供給量の拡大、成長へと転換する「時期に到達した」、そう述べる。これも時勢主義に基づく、説得の文法としてはイソモルフ(同型)の言明なのである。

「高度成長」という命名とその国民による受容は、まず、それが「大」でも「新」でもないところの「高」のイメージ基質のうちに生じたイメージ交換であることを示している。そのことが語っているのは、直接的には、そこに現れている社会変動(歴史変動)の原動力がある限定のもとに置かれているということなのだが(この場合は政治的軍事的拡大の不可能を意味する「政経分離」のこと)、より長い視野の中でいえばそれは、「大」、「新」、「高」というイメージ基質のもとに提示され、受容される社会変動の原動力が不変の動態、またさらに不変の受容動態のうちにある、ということなのである。

つまり、この丸山の仮説にしたがうなら、ここに述べた「大」「新」「高」とは、丸山がいう記紀の時代から続く日本人の歴史意識の「古層」の近代における一表象にほかならないのではないかという疑念にわれわれはとらえられる。

ところで、そうだとすると、このことは、1960年代に生じた一大社会変動としての「高度成長」について何を語っているのだろうか。

日本人は、敗戦期、高度成長期と、二度、激しい社会変動を経験した。この二つの社会変動は法

的、政治的な前者の変動と経済的、社会的な後者の変動と、それぞれにその動態が異なる。しかし、その変動を受けとめ、受容するその仕方において、日本人は全く同一の動態を示しているのではないか。これらの社会変動を日本人はつねに「生起するもの」、「つぎつぎ」になりゆく変化として受けとめ、そこにただ一つの「力」だけを感じてきていることを、時に「大」、時に「新」、時に「高」というイメージ基質のうちにこの変動を受容してきた日本人のあり方は、語っていると見られるのである。

「高度成長」は、ふつう、日本人と日本社会がどれだけ変わったか、その変化を画す契機として語られ、考察の対象とされてきた。けれどもそれは、むしろ日本人がその外的な変化にもかかわらず、いかに変わらないかを示している。変わらないというだけでなく、これらの変化を共に蒙り、共通した受容動態で受けとめることを通じ、日本人はさらに「高度成長」をへて、いっそうその均質社会性を高めているのではないだろうか。日本の枠内で見れば「高度成長」は一大変化の節目なのだが、これを日本社会の外から見れば、この期間を通じ、日本人と日本社会は同一の身ぶりを反復し続け、いよいよ均質性を強めたといえなくもないのである。

では、1960年代の「高度成長」は、どのような均質化を、その時期を生きた日本人に及ぼしているといえるのか。

われわれの研究は、まだこの点に関しては考察の途上にあるといわなくてはならない。以下、この第二の問いについて、第三の問いをも視野に入れつつ、メモふうの一つの分析視角を提示しておくこととする。

6

この点に関し、一つの示唆を与えるのはこの同じ時期を日本とは異なる時間の中に生きてきた、たとえば台湾の映画である。

台湾の1947年生れの監督侯孝賢の映画「童年往事」(1985)は、台湾の1950年代末から60年代前半あたりまでを時代背景とした作者自身の自伝的

色あいの強い作品である。また、『恋恋風塵』（1987）はこの映画の脚本を担当した呉念真の自伝的作品、「冬冬の夏休み」（1984）は、やはりその脚本を侯とともに担当した女性小説家朱天文の自伝的要素を強く含んだ作品といわれており、侯孝賢の青少年期の自伝的要素を溶けこませたといわれる「風櫃から来た少年」（1983）とともに侯孝賢作品中、「回想の四部作」ともいいうる位置を占めている⁽²³⁾。

侯孝賢は、その生年が示すように台湾の戦後第一世代に属し、その脚本担当者たちもほぼ同年代である。現在44歳であり、この年代の、というより日本を含む東アジアの老若の映画監督中、国際的に現在最も注目されている映画作家の一人といってよい。

ところで、その「回想の四部作」は、ともに1950年代後半から1960年代半ばにかけての台湾、日本でいうなら高度成長期の前期から中葉にかけての時期を舞台背景とする。これらの作品を見、実地に台湾に足を踏み入れてみてわたしの受けとったのは、次のような問いだった。

ここでは小説の世界に話を限るが、日本の侯と同年代の小説家の作品に、これを「回想の時間」の視線の一瞥の届く先という点から見る時、侯のような「回想の時間幅」をもつ作品の見当らないのは、なぜだろう。

というのも、この観点に立つ時、日本の同年代の小説家の作品の「回想」の視線は、ことごとくあの「高度成長」の時期でとぎれていることに気づくからである。

たとえば、1949年生れの村上春樹の同様に自伝色が濃いと自注される作品『ノルウェイの森』（1987）は、1968年にはじまる物語の時間からなっている。『風の歌を聴け』（1979）、『1973年のピンボール』（1980）、『羊をめぐる冒険』（1982）、『ダンス・ダンス・ダンス』（1988）と続くいわゆる「鼠四部作」も、その物語的時間の始点は1970年であり、「高度成長」以前には溯及していない⁽²⁴⁾。

同じことが、もう一人の有力な同世代作家村上龍（1951年生れ）についてもいえる。その自伝的

作品『69』（1987）は、表題が示すように、北九州の方言を駆使し、1969年、作者17歳のおりの出来事を素材としている⁽²⁵⁾。

この事実、つまり、高度成長期に青年期をすごした日本の小説家の作品における「回想の視線」あるいは「回想の時間幅」が、高度成長期を越えず、そこでとぎれてしまうという事実は、何を語っているのか。

というのも、これは上記の二人に限らない。同じことが、1946年生れの中上健次、1947年生れの立松和平、1948年生れの三田誠広と、彼らとはほぼ同年代の少なくとも男性の小説家の自伝の色合い濃い作品に、広く認められるのである⁽²⁶⁾。

たとえばこの問いにたいして、それは、彼らの青年期と高度成長期とが重なっているということにすぎず、彼らはそこでいずれにせよ青年期の物語、「青春」期の経験を扱っているのだという答えが想定される。

けれども、そうであれば、先の問いはこう言い直される。

なぜ彼らの「回想」は、こうして「青春」期で止まってしまうのか、と。

ここには、眼に見えないながら、「回想の視線」、「回想の時間」をとぎれさせる“壁”のようなものがあると感じられる。

回想の時間の幅を井戸の深さにたとえれば、その井戸の淵に手をかけ、見下ろすとその井戸は1950年代なかばまで深く届いている、というのが侯孝賢の作品から受けとられる感じなのだが、そういうことは、日本の小説家に認められない。その作品が、日本の同年代の小説家の作品の多様な作風とは対照的な、その「回想の時間」幅の均質さに、われわれをして気づかせるのである。

彼らの井戸のそれぞれの長さは異なる。けれどもそれは、井戸の掘られる地表地点の高低差による。それぞれの長さは異なるが、その海拔上の「深さ」は一定している。それらは、ともに1960年代後半、1964年から70年までの期間で杜絶している。高度成長期がそこではいわば回想の井戸の前に立ちはだかる堅固な岩盤、“壁”として現れているのである。

たとえば村上龍の『コインロッカー・ベイビーズ』（週刊誌連載後、1980年に刊行）。この1970年代の末に書かれた小説に作者は明らかに幼年時代の何らかの記憶を塗りこめている。けれども、それは1950年代の記憶としてではない。この小説は、1972年生れの二人の遺棄された子どもの青年期までの物語となっており、書かれた時点からいうなら1990年代にまで届く近未来SF小説という虚構の時間軸の上に展開されている。

その村上が、自分なりにその「回想」の井戸を1969年にまで掘りすめた『69』は、たぶん佐世保地方の方言を多用したものとなっており、この事実はまた、この作品の影響下に構想され、成功をおさめたもう一つの作品のことを思いださせる。というのも、1949年生れ、村上春樹の同学年だった芦原すなおの直木賞受賞作『青春デンデケデケデ』（1990）は、この年代の小説家の作品として異例にその「回想の時間」を1964年、「エレキ・ギター」の登場の時点にまで掘りすめたものだが、全編、四国讃岐地方の「方言」を駆使して書かれており、この岩盤を越えるために「方言」使用を含む何らかの方法意識が必要であることを、理由こそわからないにせよ示唆しているかに見えるからである。

日本で高度成長期に青年期を過ごした戦後の第一世代は、1946～49年生れのベビー・ブーマーであって「団塊の世代」と呼ばれる。彼らが1960年代末に学生反乱の時期を現出させたことから彼らにはまた「全共闘世代」という呼称もある。

ある強烈な時代共通経験が、一つの年代層の感性を強く規定するというのは近代以降であれば広く見られる事実である。日本の近代でいえば、大正デモクラシー期、昭和初期のマルクス主義席捲期、戦争期などがそれぞれに強烈な世代経験ともいべきものを含んだ時期として知られている。

けれども、この上記の事実を、こうした世代経験の諸帰結のうちの一つと見るのには無理がある。

というのも、こうした世代経験は時間を経過するにつれ、弱まり、拡散するのをつねとするのだが、ここにあるのは、時間を経過するにつれ、逆

に明らかになってきた「高度成長」世代（高度成長期に青年期をすごした世代）に共通の事実——作品における回想の困難さ——といわなければならないからである。

それは何を語っているのか。さしあたりそれは彼らの「回想」の時間性をめぐめるある均質性を語っている。しかし、ほんらい「回想」とは一人一人の個人の固有性が最後まで色濃く残る領域を意味しているのではなかっただろうか。そう考える時、この事実は、次のことを示している可能性を否定できない。つまり、「高度成長」は、その時期を多感な年齢で通過した日本人の内的時間を、実は深く拘束する働きをもったのではないか。この時期を越えて「回想」することの困難さのうちに、「高度成長」の「ツメ痕」は残っているのではないか。

この研究ノートでは詳しい分析はできないのだが、わたしはたまたまこの世代に属している。そして自分を顧りみて、自分の「回想」の視線が侯孝賢におけるように、一瞥のもとに自分の幼児期にまで辿りつくものとなっていないことに気づく。たとえばわたしは、幼児期と少年期、高校卒業時までを東北の地方都市にすごした。そこでわたしは東北の方言を口にしていたはずでもある。けれども、現時点に端を発するわたしの「回想」の視線は、いったん1966年、わたしの上京時で杜絶する。そこから先は、いわば「レンズを変えなければ」見えない。天体望遠鏡にいう、あの倍率の異なる「接眼レンズ」を交換しなければ、その先が見えないと感ぜられるのである。

いったい何が起きているのか。侯孝賢はその青年期を「高度成長」によって「分断」されていないのだが、その日本の「高度成長」外部の作品の「回想」の時間性に接して、わたしはこういう自問を強いられる。

日本の敗戦から「高度成長」終了までの4半世紀は、その社会変動の幅として世界的にも未曾有の激動を経験したといわれる。日々の食事にも事欠く穴居生活のレベルから、いわゆる「昭和元禄」の時期をへて「飽食」と「使い捨て」の時代へ。なかでも「高度成長」期はその社会変化が最もド

ラスティックにその成員にたいして現れた時期にほかならない。そしてそれを最も強く受容したのがその時期に少年期から青年期を送った年代の者たちだった。「高度成長」は、少なくともその年代の日本人の時間感覚ともいうべきものを一様化させたのではないか。それほどまでに、その社会変化の「均質化」の力は強かったのではないだろうか。

その均質化の強さを感じとるのに、ほかに方法がないというのではない。

たとえばわれわれは、かつてわれわれの過ごした場所を、年代ごとに、いま再訪してみるという方法によってもこれを再確認できる。わたしの例でいえばわたしが5歳の時にすごした地方都市の公務員用アパートは、もうない。アパートがないばかりではなく、その前にあった道路すらすっかり道筋を変えてしまった。目安にするものが、その地点に立ち、視線をぐるりと回してもどこにも見当らない。

1990年3月、台湾に調査旅行に赴き、台北、高雄、台南等の都市と台湾における辺境の地である蘭興島を訪れた。

台湾はいま「高度成長」のさなかにあるとってよいだろう。新しいビル群が林立しているが、たとえば東京との違いを一言でいうとその地での表通りとそこから一步入った路地の落差がきわめて大きい。1990年代の近代都市台北の大通りから一步狭い路地に入る。するとそこに30年前から変わらないと思われる暗い路地の景観がひらける。そこには全く異質の時間が流れている。いわば、光と闇の、超近代と前近代の時間の落差が「深い」。侯孝賢の映画は、その落差に生じる「回想」の深い深い井戸を掘りあてているのである。

終りに

「大」「新」「高」というさまざまなイメージ基質のもとに社会変動が社会成員の前に現れ、受容されるという時、そこに顔を出しているのは『古事記』の時代から続く「アスカビ(葦牙)」の発芽・生長・増殖として歴史の動態をとらえる日本人の「歴史意識の『古層』」であるかも知れない。

なぜ、これほどの絶えざる社会の激変に日本人がたえられるのかといえ、たぶんそこに不変のこの「歴史意識」があるからなのかも知れない。逆にいえば、この「歴史意識」の「古層」をつきぬける、そうした歴史的变化をこの国、この社会はへていない。日本は、世界的に見ても長く続く「皇統」を有する国でもある。つまり、日本はこの「皇統」を切断するていの「革命」をへていない。このことが、丸山いうところの日本人の「歴史意識の『古層』」の不変の現存のせいであるのか、つまり日本人に「作為」的歴史意識が形成されてこなかったためであるのか、あるいは逆にこのことが「歴史意識の『古層』」たる「時勢主義」の現在にいたるも衰えないことの原因であるのか、それはわからない。

ここでの考察から導きだされるのは、イメージ基質の問題として、「大」「新」「高」のサイクルを脱する契機とはどのようなものか、ということだろう。「革命」や「天皇制廃止」によってこの日本の歴史意識が変わるのか、あるいはその逆か。しかしこの種の議論はそれ自体、一つの閉回路を形成している。歴史形成の主体性の確立という戦後初期の主張もまた、この国では「いまや新しい時代が到来した」という「新」のイメージで語られてきたのだからである。

この「大」「新」「高」をいわば内側から食い破るイメージ基質とは、どのようなものだろう。侯孝賢の映画におけるけっして「反近代」的ではない「回想」の視線の質は、たぶんそれを考える一つの手がかりを提供している。

この先の問題について、その考察の一端をわたしは日本の漫画作品を素材に「ゆるやかな速度」(1990年、『ゆるやかな速度』中央公論社、所収)で試みているつもりだが、その考察が結論を見ているという手応えはまだつかんでいない。

以上、走り書的に「高度成長」研究の中間報告を記した。研究をはじめて5年たつがまだ中間地点である。概念操作、分析視角、調査事項等に未確定、未了の点がままあるけれども、スケッチふうの研究、考察のすじみちを示し、これを中間報告の「研究ノート」とする。〔なお、本文中、

『大』、『新』、『高』(『日本風景論』講談社、1990年所収)と重複する部分があることを付記する。調査を手伝っていただいた本学社会学部大学院博士課程在籍の加藤宏氏および国際学部附属研究所ドキュメンタリスト金子頼子氏にこの場を借りてお礼申し上げる。

(1991・12・25)

注

- (1) たとえば、Vogal, Ezra F., "Japan as Number One", Haward University Press, 1979, p. 69. ちなみにそこに書かれた原文 "the rapid growth period of 1955 to 1964" は訳書『ジャパン・アズ・ナンバーワン』(TBSブリタニカ、1979、広中和歌子、木本彰子訳)で「1955年から1964年までの高度経済成長の時期」と訳されている(p. 95)。また Reischauer, E. O., "The Japanese", The Belknap Press of Harvard University Press, 1977 の中に "rapid growth" という用語はほとんど見当たらない。しかし日本語訳にその用語は入っている。たとえば "By the late 1950s the Japanese economy was racing ahead and for more than a decade thereafter averaged annual growth rates around 10 percent in real time—a record no other major nation has ever equaled" (p. 115) が、日本語訳ではこうなっている。「1950年代の終り、日本経済は早いスピードで前進し、その後、10年余にわたり、(年率しかも実質で)10パーセント以上の成長をとげた。これは、他のいずれの主要国もいまだに達成していない記録的な高度成長であった」(『ザ・ジャパニーズ』國弘正雄訳、文藝春秋、1979、118頁、下線引用者)。

前者で「高度経済成長」に対応するのは "rapid growth", 後者で「高度成長」に対応する語はない。「高度(経済)成長」という用語の奇妙な性格がここにも現れている。なお、フランス語における「高度成長」の訳語は、haute-croissance であり、これは "高度成長" の逐語訳だが、この語が日本の「高度成長」以外に使用されている例を著者はまだ見つけていない。

- (2) Novaya ekonomicheskaya politika. 「新経済政策」。革命以来の急速な国有化政策の破綻等による社会的経済的危機に対処するため旧ソ連邦で1921年以来とられた自由経済を一部取り入れた経済政策の体系。1929年の第一次5ヵ年計画の採択と全面的農業集団化政策の開始で一応の終了を見た。
- (3) 多田道太郎氏の教示による。ただし、出典未詳。
- (4) 変化の受けとめ方におけるイメージ基質は日本に限らず、近代社会において「新」という形を取る。場合によって、それが「大」ともなれば、また産業構造の高次化によって、それが特に先進諸国に

おいて「高」のイメージ基質を伴いもすることは、たぶんたしかなことだろう。しかし、ここでは、日本社会におけるこの「大」「新」「高」の連関に固有の意味を認める立場に立ちたい。日本社会ではこの三種のイメージ基質がつねに現存し、累積している。極端に言えば、それはいつも代替可能である。そのイメージ基質は強い指示性をもっていない。その浮遊性にたいする近代的原理の抵抗力は、他の欧米先進諸国にくらべ、日本においてきわめて小さい。

- (5) 『中央公論総目次』は1887年から1980年までを網羅しているが、このほかに総合雑誌の総目次として『文藝春秋』(『文藝春秋35年史稿、付総目次』、1959年刊、1923~57年の目次収録)、『世界』(『世界総目次』、1985年刊、1946~85年の目次収録)、『改造』(『改造総目次』、新約書房、1966~68年刊、1919~55年の目次収録)等がある。
- (6) 中村隆英『昭和経済史』(『岩波セミナーブックス17』、岩波書店、1986年) pp. 121-122。
- (7) 笠信太郎『日本経済の再編成』(中央公論社、1939年)。この本から伝わってくるのは、経済をつうじての "日本" 社会の質的变化の感触である。この本の中には、たとえば次のような表現がある。「輸出促進の問題は、ここまで来るともう既に平面的な編成替から、もう一つの次元に這入ってくる。即ち編成替に新しく立体的な方向が要求されるのである」(傍点原文、p. 17)。「例へば、低物価の政策をとるには、しかもこれと同時に拡充を並行せしめるには、今のコスト高の企業、或は中小企業を何らかの形で編成替をやらなければそれを遂行できないといふ問題である。この問題に対しては、各業態によっていろいろ相異なるものがあり、一概には勿論いひ得ないが、その一般的方向としては、一、大体に強制カルテル或ひは強制トラストの結成に進むであらう。二、同時にそのカルテル或はトラストはこれまでのトラスト乃至カルテルとは違って、性質の変化を来すであらうといふことである」(傍点原文、p. 137)。
- (8) 正村公宏は『戦後史』(筑摩書房、1985年)で『国民所得増進計画』の基本的アイデアは池田内閣固有のものではなく、むしろ岸内閣時代に構想されたものを池田内閣が継承し、確定し、普及したにすぎなかった」と述べ、岸が1959年5月末に「国の経済規模を10年で倍にする計画をたてるべきだ」という構想を固め、同年11月26日に経済審議会に新計画策定を諮問している事実をあげている(同書下巻、pp. 156-157)。岸のほかにも池田内閣の「高度経済成長」政策をささえた経済ブレーンに稲葉修三、星野直樹(元満州州総務長官で、岸と同じ元商工省官僚)など、「高度国防体制」をになった元「新官僚」の名が見えることは注目に値する。
- (9) 『平凡社大百科事典』(1985年)第7巻、「新羅」の項による(p. 738)。

- (10) 「文学における新官僚主義」(1937年3月)。中野はこの文学時評めいた文章の中で、横光利一、小林秀雄を論駁しているが、まず、冒頭、兩人の近作に「非常にいやなものを感じさせられた」と述べた後、こう続けている。「そのいやさ加減というのが、それについて書いたり考えたりすること自身しんそこいやなような、同時にそれについて考えもし書きもししずにいられぬといった種類の、やっかないいやな感じで、去年(1936年)の暮れのたしか25日の真夜中、非常な大声で日独防共協定の成立がラジオで発表されたが、いま言いたいいや感じの性質があれにやや似てるなど感じ、日本で今いちばんいやなものの一つが例の新官僚主義とかいわれるやつなのだが、私はいよいよ文学にも新官僚主義の擡頭ということになったわいと感じたことだった」(『中野重治全集』第11巻、筑摩書房、1979年。p. 23, 傍点引用者)。
- (11) 『大岡昇平俘虜記』(『現代日本文学大系59・大岡昇平集』筑摩書房。1966) p. 191。
- (12) 正村、注(8)書、下巻 p. 170 による再引用。
- (13) 中野好夫「もはや『戦後』ではない」(初出『文藝春秋』1956年2月号、『中野好夫全集』第2巻、筑摩書房、1984年所収)。pp. 148-165。
- (14) 香西泰『高度成長の時代——現代日本経済史ノート』(日本評論社、1981年) p. 113。
- (15) 岩井克人・三上治「マルクス経済学はなぜ破綻したのか?」(『別冊宝島47・保守反動思想家に学ぶ本』JICC 出版局、1985年、所収)における岩井発言。pp. 47-48。
- (16) 丸山真男「歴史意識の『古層』」は、1972年、筑摩書房刊『日本の思想』第6巻『歴史思想集』の解説として書かれた。同書 pp. 3-46。
- (17) 同前、p. 17。
- (18) 同前、p. 17。
- (19) 同前、pp. 23-24。
- (20) 同前、p. 26。
- (21) 「時勢に就いて」(『中央公論』1936年1月号、同誌1989年4月号に再録)。ここでは触れないが、この観点に立つとき、検討に値するのは、「瘦我慢の説」における明治期の福沢諭吉と勝海舟の対立ではないかと思われる。
- (22) 笠、注(7)書、p. 1。
- (23) 荒井曜「視力——『童年往事』」(『WAVE』第21号『台湾香港新映画宣言』ベヨトル工房、1989年1月、pp. 66-71)で荒井はこの四作を「回想の4部作」と名づけている。
- (24) 村上春樹『ノルウェイの森』の物語の時間の始点は、主人公大学入学時の1968年の春であり、その回想は3年ほど前のキズキの自殺、直子との出会いの時期にまで溯及するが、それを計算に入れても高校時代、1965年どまりである。また「鼠4部作」の第一作『風の歌を聴け』には、このような一行がある。「この話は1970年の8月8日に始まり、18日後、つまり同じ年の8月26日に終る」(講談社文庫、1982年、p. 13)。
- (25) 村上龍『69』(集英社。1987年)。作中にこうある。「1969年、この年、東京大学は入試を中止した。ビートルズはホワイトアルバムとイエローサブマリンとアビーロードを発表し、ローリング・ストーンズは最高のシングル『ホンキー・トック・ウイメン』をリリースし、髪は長い、ヒッピーと呼ばれる人々がいて、愛と平和を訴えていた。パリではドゴールが退陣した。ベトナムでは戦争が続いていた。女子高生はタンポンではなく生理綿を使用していた。/1969年はそんな年で、僕は高校の2年から3年に進級した」。(p. 5)。この作品で村上は、彼の生地の佐世保の方言をそのまま用いていると考えられる。たとえば次のように。「おい、アダマ、お前ね、クリームって知っとっか?」「クリーム? アイスか?」「ばあか、クリームってイギリスのバンドの名前やっか、知らん?」
- (26) たとえば中上健次の『19歳の地図』、『岬』、立松和平の『遠雷』、三田誠広の『僕って何』。いずれにせよ彼らの小説世界においてもまた、侯の作品におけるように、「回想」が屈折なしに60年代中ばの閾を過ぎることはない。事実として彼らに、その時期を越えた「回想の時間幅」をもつ作品はいまのところ存在していない。